

舞鶴ゆき

42 経済 小林 邦宏



「まいづる」って何処にあるかご存知ですか？
京都府北部にあります。舞鶴を68年振りに訪れました。と言
っても記憶がある訳ではなく、実感
としては初めての舞鶴です。大阪か
ら高速バスで2時間余の彼の地は
静かで穏やかですが、言葉を換えれば物悲しく寂しげな、都会の華やか
さから取り残された地方都市といった風情でした。舞鶴を訪れた理由は、
私が日本で踏んだ初めての地だったからです。



私は昭和19年12月12日に満州の大連で生まれました。
当時大連は日本人が沢山住む大きな港町だったそうです。西欧風の街並
みが美しく、5月第2週にはアカシヤの花が咲き乱れその甘い香りが満
ち満ちていたようです（「アカシヤの大連」清岡卓行著に詳しい）。
星が浦は美しい海水浴場で夏には賑わい、大和ホテルは西洋風のとても
立派な建物でした。昭和10年と12年生まれの子供は小学校に

通っていましたが、冬は寒さが厳しく道がすぐ凍る状況だったとか。高
学年の男の子が夕方学校帰りに校庭に水をまきそれが翌朝には凍って
天然のスケートリンクに早変わりするそうです。スケートが苦手な姉た
ちは往生したようです。大陸とはいえ日本人居留地の様で、美しい自然、
美味しい食べ物、メイドや男衆に支えられた快適な暮らしが昭和20年
8月9日を境に暗転します。



ソ連の大戦への参戦です。日ソ中立条約を破り突然宣戦布告したソ連軍が怒涛の如く満州に押し
寄せました。それからはソ連軍の殺戮、暴行、略奪など大連も完全に蹂躪されることになります。
日本人は少しずつ固まって大きな建物に籠り、ひたすら隠れて暮らす日々が始まります。そこから
日本に引き揚げるまでの苦難の歴史は各家庭で違っていても凄まじい苦勞の連続であったことに
違いはなかったようです（「大連・空白の六百日一戦後、そこで何が起こったか」富永孝子著が生々
しい—この本が発売された時、母に読んでみたらと渡したが全く気乗りしない様子で受け取ったこ
とに、思い出したくもない忌まわしい過去だったのかと改めて感じたことが記憶に残っている）。
赤子だった私が役に立つ場面もあったようです。ソ連兵は赤子をおぶった女は襲わないという噂が
あったようで、女性が外出する折に私が貸し出されることがしばしばあったそうです。

敗戦から1年半後、昭和22年2月に
人、兄、私）の我家一家は苦難の日々を
への引揚げ船に乗ることができました。
た。父は招集され敗戦後シベリヤに抑留
信不通、生死も分かりませんでした。我々
4日に舞鶴港に到着します。当時外地からの引揚げ船は佐世保等各地に帰港しましたが、我々が舞
鶴を希望したのは母の故郷が滋賀県五箇荘であったためです。引揚げ船に乗ったから安心とはいか



引揚げ船「興安丸」

母と4人の子供（姉2
乗り越えやっと日本
私は2歳2カ月でし
されていたようで、音
の引揚げ船は2月1

ず、乗船中も食べ物には苦労したようです。主食はコーリャンが普通だった中で私だけがコメのおかゆを食べたとのこと（殆ど吐いたようですが）。それは私が敗戦後の食糧難や不衛生のため栄養失調となり半死半生ならぬ九死一生くらいの状態であったためのようです。航行中実際夕方4時になるとその日一日に死んだ人（主に子供）が汽笛を合図に水葬に付されたようで、母は今日は我が子の番かと覚悟の日々だったそうです。

無事舞鶴に揚がった後、母の実家から迎えに来た人と会え、五個荘の家の倉に落ち着くことができました。私の瀕死の状態は変わらず、私が成長した後に母方の祖母から「還ってきて見た時、この子はよう助からんとおもたな」と何度聞かされたことか。奇跡的に命が繋がったのは正に母の愛情と「助からんのなら口を開けて食べたいそぶりをするものを食べさせる」と医者からの指示に従わなかった決断だったのでしょう。しかも驚くべきことに無一文で子供を一人も死なせることなく舞鶴に引き揚げてきた時に母は何と32歳でした。こうして私は生き永らえて、古希を過ぎて舞鶴に舞い戻ってくることになってしまいました。



舞鶴引揚記念館は平成27年9月にリニューアルした平屋建ての大きくはないが綺麗ですっきりした佇まいでした。ユネスコ世界記憶遺産に登録されたためか駅から遠く辺鄙なところなのに、平日にも拘らず観光バスが多く来ています。記念館には引揚げ船の資料、当時のニュース映画、引揚げ関連のラジオの番組等資料だけでなく音声や映像も流されています。またほぼ半分のスペースは抑留関係の資料が展示されています。



記念館だけではなくタクシーの運転手に引揚げ船が係留した場所、そこからはしけに乗って引揚援護局前に上陸し、手続きをした後に再びはしけに乗り東舞鶴駅に近い埠頭に上陸した場所などを案内してもらいました。有名な「岸壁の母」の場所は海に突き出た展望台の様な姿ですが、そこは昔の岸壁ではないとのことでした。舞鶴引揚記念館では舞鶴市の文化振興課の方に面会し、私達母子5人の引揚げ証明書（昭和22年2月14日付）と父が引き揚げてきたときの同引揚げ証明書（昭和22年11月22日付）の原本を寄贈してきました。（貴重な資料なので、当方が良ければ寄贈を受けたいとの話であったため。）



今回当地を訪れようと思ったのはこの引揚げ証明書に依るのです。3年ほど前に母の遺品を整理していたところこの証明書が出てきました。原本は質の悪いワラバン紙の様なものでインクも薄れていましたが文字は何とか判読できます。我々にとっては貴重な資料ですが、他人には無価値でしょう。また私の家族の歴史だとして娘たちに譲っても彼女たちにとっては処分するにできない厄介なものになりかねません。とすれば引揚げ関連の記念館に寄贈するしか道はないと思っていました（先方が受ければですが）。新宿にも「平和祈念展示資料館」がありますが、先ずは自分達が引き揚げてきた舞鶴の優先順位が高いと思っていたところ、新聞で舞鶴引揚記念館がリニューアルされ世界記憶遺産にもなったとの報道があったので、意を決して舞鶴行きを決断したという訳です。



気になっていて念願だった舞鶴行きは終わりました。

感慨があるかと思いましたがそれほどでもなかったというのが実感です。それはそうでしょう、自分には一片の記憶もない処なのですから。しかし記憶はなくてもここが自分の日本を踏んだ初めての地か という胸の痛みの様なものは感じていました。次は生まれた地の大連になるのでしょうか。しかし多分行くことはないと思います。風光明媚、美しい海、素敵な街並み、雪のように降り注ぐアカシアの花とかぐわしい香り、としても今の自分は観光客でしかあり得ない。誰か当時を知る人と一緒に歩きながら当時を偲ぶのであればまだ多少の感慨はあるでしょうが。凡夫の私にはその後の人生で語るべき程の物語は殆どありません。つまり大連での出生と苦しみながら還ってきた引揚げが人生最大の出来事なのかもしれなません。そこに何の記憶もないという皮肉が苦くもあるのですが。